

シングルの女性農業者におけるライフコース選択

——青森県の事例から——

千葉大学大学院 長船亜紀子

1 目的

農業の後継者不足が深刻な現在、女性の就農推進に関する施策がとられている。しかし、農業・農村における女性の地位向上は進んでおらず、子育て世代女性の農業離れは著しい。これまで課題となってきたのは、結婚を機に就農した女性がいかにパートナーとしての地位を獲得するかであり、結婚・出産の選択可能性を持ったシングルの女性は調査・研究で焦点化されてこなかった。そのため、現代における女性農業者のライフコース選択の実態を提示することが本報告の目的である。

2 方法

農業が盛んな東北で女性の生涯未婚率が最も高い青森県を調査地として、シングルで20～40歳代の女性農業者10名を対象にインタビュー調査を行い、聞き取ったデータをもとに分析を行った。対象者を出生コーホート別に確認し、就農時期が2つのまとまりに分かれていたことから、1970～1980年代に生まれ(30～40歳代)2007～2011年に就農した5名を「第1世代」、1990年代に生まれ(20歳代)2015～2018年に就農した5名を「第2世代」として、比較検討した。従来、家族や組織といった集団の枠組みでしか捉えられてこなかった女性農業者のライフコース選択に焦点を当てることで、直面する事態や女性たち自身の意識について、ジェンダーの視点から考察した。

3 結果

分析の結果、2つの世代に違いと共通点がみられた。違いとしては、進路と初職選択・就農のきっかけ・就農後の現状における管理する場の有無、という3点が挙げられる。共通点としては、進路と初職選択における家族の影響・就農時期の時代背景・家父長制に影響されない・家族の状況に対する忖度、という4点が挙げられる。これら結果をまとめると、対象者たちは家族の影響を受け家族の状況を読み取りながらも、管理者とも後継者とも期待される農業を、自身が主体的に動ける職業として好意的に受け入れ、それを選択していたのである。

4 結論

以上から、農業に従事する女性たちは長きにわたって「犠牲者」として語られ続けてきたが、イエ意識や家父長制に「利用される」のではなく時にはそれらの状況を「利用する」側になり、管理者として力を発揮する女性農業者の姿が明らかになった。渡辺(2009)は、多くの女性は農業資産を一部でも継承したいとは思っていない、と述べている。また原(2014)も、女性たちは高い意識を持ってまで活躍することは選択していない可能性がある、と指摘する。このような解釈は「嫁」として婚入し就農した女性にのみ適用されるのではないだろうか。本研究によって示されたのは、経営主として農業資産を持つことに積極的・肯定的な女性たちの存在である。それは、何かと集団で語られがちな農業の分野でも、その枠組みで捉えられることから距離を取ろうとする女性たちの意志と実践によって、「個人化」という時代の変革期が到来していることを示しているのである。

文献

- 原珠里, 2014, 「女性プロ農業者が活躍する環境づくり」『AFCフォーラム』62(2):3-6
渡辺めぐみ, 2009, 『農業労働とジェンダー—生きがいの戦略』有信堂高文社